

「救いのかぶとをかぶる」

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17

July.12.2026

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17 (パウロ)

Preface

3週ぶりになるでしょうか、続けて、主なる神様が私たちのために備えて下さった神の武具について学んでいきたいと思えます。

これまで、腰に締める真理の帯、胸に着ける正義の胸当て、足にはく平和の福音の備え、そして、信仰の盾について学んで参りました。

今朝は、来週と2週に渡って、その次の「救いのかぶとをかぶる」ということについて考えて行きたいと思っております。

まず、そもそも、「救いのかぶと」とは何を意味するのかということについて探っていききたいと思えます。

「救い」と言いますと、真っ先に思いつくのは、イエス・キリストを信じることによる「救いの確信」ということかもしれません。

「救いの確信」、つまり、私たちを愛して下さった方によって、すべての戦い、死も、いのちも、裸も、危険も、苦悩も、苦難も、どんな被造物も、何ものをも、私たちを神の愛から引き離すことは出来ない圧倒的な勝利者だという事実です。

圧倒的な勝利者です。

ところが、ここで一つ疑問に思うのは、「圧倒的な勝利者であるならば、なぜ、かぶとなんていう武具をかぶる必要があるのか」ということです。

防御の姿勢を取る必要もない、余裕たっぷりの圧倒的な勝利者なのにです。

何で、かぶとを、救いのかぶとという、私たち人間にとって最も分かりやすい、直ぐ目につく、最も大事な急所である頭を守るかぶとをかぶる必要があるのかということですか。

理由は明白です。

神の恵みによって救われ、圧倒的な勝利者とされたという揺るぎない栄光の身分が、あたかも揺るぐものであるかのように揺るがそうとするこの暗闇の世界の支配者たち、もろもろの悪霊・悪魔の熾烈な攻撃がある、受けるからです。

どう受けるのかと言いますと、「ああ、もう信仰なんかやめよう。もう疲れた。もういいよ」という思いを抱かせられる、抱いてしまう程に、私たちに与えられたイエス・キリストによる救いを最後まで全うする、行く抜くということは、生半可なことではないということです。

Part One

「私たちが信仰生活をしていく中で、最もたくさん受ける試み、信仰の戦いは何だろうか？、今まさに、何をもって信仰者は格闘をしているだろうか？、唯一まことの神を信じる、主イエスを信じる聖徒がつまずく信仰上の試練、危機とは何だろうか？」と考えてみます。

何でしょうか？

高慢かもしれませんし、疑い・疑う心かもしれませんし、または怠惰・信仰的自堕落かもしれません。

もちろん、それらも大いに信仰の危機、戦いと言えるでしょう。

ただ、エペソ書の著者である使徒パウロ先生がお書きになった新約聖書の中のすべての書簡で最も多く、一貫してイエス・キリストを信じるクリスチャンたちに勧め、励まし、言及しているのは、特定の何かに「気をつけなさい」とか、「これこれを所有しなさい」というようなことではなく、「忍耐しなさい。耐え忍びなさい」ということだということを、聖書を読んでいきますと発見します。

ここで言う忍耐とは、苦しさや不快な思いをただ無意味に押し殺す我慢ではなく、目的や目標のために現状や苦難を前向きに受け入れて耐え抜く、勝ち抜く力、信仰生活を生きる中で最も大きな試み・試練とも言える疲弊や落胆を耐え抜く、勝ち抜く力なんだと思います。

そして、この忍耐こそが、「救いのかぶとをかぶる」ことなんだということを、第一テサロニケの御言葉をもって確認したいと思います。

第一テサロニケ5章に行ってみましょう。

テサロニケ第一5：7－8（パウロ）

「救いの**望み**というかぶとをかぶり」、エペソ書の「救いのかぶとをかぶり」という御言葉に、ここ第一テサロニケでは、「救いの**望み**というかぶと」と、「望み」という言葉が付け加えられています。

つまり、「救い」とは、「過去に一度なされて、はい終わり」というものではなく、「救いを望む」という「望むべき救い」、「将来・未来に到達する救いがある、約束がある」、「結局どうなるのかという行く末がある」ということです。

聖書の言う「救い」には、綿密に言いますと、二種類あるように思います。

「始まった救い」と、「到達する救い」の二種類です。

「始まった救い」とは、「永遠の滅びに至るしかなかった私たち罪人が、イエス・キリストの十字架の贖いによって救われたこと」、つまり、信仰者がかつて過去に経験した救い、信仰告白です。

「救い」と言いますと、大概、この「始まった救い」のことだと認識しながら使っているように思いますが、エペソ書6章の「救いのかぶと」、「救いのかぶとをかぶる、かぶり続ける」とは、「到達する救い」を意味している言葉だということが見えてきます。

私たちが最終的に、神の御前に立つ時、栄光の主の御前に立ち、ことごとく涙をぬぐい取って頂きながら、用意された義の栄冠を授けて頂くその時、その救いに到達するために必要な武具が、「救いのかぶと」であり、そこに到達するために取るべき行いが、「救いのかぶとをかぶる、かぶり続ける」ということです。

即ち、「救いのかぶとをかぶる」という武装は、信徒たちにとって最も致命的になり得る信仰生活上の妨害である、疲弊、疲れ、落胆、落ち込みに対する武装であり、戦闘において最も分かりやすい致命的な急所である頭に相当するのが、信仰を生きていく中で経験する落胆、疲弊だということです。

私自身、この落胆と疲弊を何度も通り、今も通らされているように思いますが、そんな時ごとに耐え抜く力となったのが、「この救いを達成しなければ！この救いの最後に待ち受けている栄光・栄冠を手にはせずして終わってしまえるのか！」という聖なる信仰の火事場の馬鹿力のようなものを発揮させて頂きながら、または、小さな植物の種が生き成長するために、殻を破り、土の表面に芽を出すかのような小さくて、微かで、静かだけれども、確かな力を発揮させて頂きながら生きて来たように思います。

主イエス様にある救いのかぶとというかぶとをかぶり続けることを辞めることなくです。

以前、めぐみ教会の副牧師であられた保浦先生に、「先生、牧師を辞めたいと思ったことはないですか？」と聞いたことがあるのですが、その時、保浦先生がこう答えて下さいました。

「あるよ。でも辞められないよ。だって、僕が牧師辞めたら、これまで会ってきた人たちを裏切ることになってしまうからね」と答えて下さいました。

この保浦先生の言葉を忘れることが出来ないのですが、今思いますと、この保浦先生の言葉を、「疲弊や落胆や落ち込みを感じても、それでも主にある忍耐を発揮し続ける救いのかぶとをかぶり続ける言葉として、知らず知らずのうちに捉えていたんだなあ」と思われます。

Part Two

もう一度、第一テサロニケの御言葉を見てみたいと思います。

テサロニケ第一 5 : 1 - 11 (パウロ)

私たちキリストを信じるキリスト者は、「結論」を、「行き着くところ」を知る者たちです。

この世がすべてではなく、次の世があることを知っており、今生きていることが私たちのすべてではなく、来たる世があり、今ここで価値あることが価値あることではなく、永遠の価値が何なのかを知っている者たちです。

この暗闇の世にあって眠っている夜の者、闇の者たちのように、ここが、こ

の世界がすべてであるかのように錯覚しながら、食べて、飲んで、酔って、放蕩してとは違い、昼の者として、光の子どもとして目を覚まし、身を慎みながら、忍耐するのです。

6 節、8 節にある「身を慎む」という言葉を英語の聖書では、「self-controlled」（自制）となっています。

最近、我が家の末っ子によく言われる言葉が、「お父さん、コントロール！その食欲をコントロールしないと血圧上がって早死にしちゃうよ」という言葉なのですが、信仰においても、神より与えられたこの尊い自由意志を大いに用いて、コントロールすることが求められています。

もちろん、だからと言って、父なる神様が私たちを召し出して、イエス・キリストの十字架による救いを得るようにして下さったのは、「どれ一回、あなたがたが出来るのか、出来ないのかを見てみようじゃないか」と試そうとしているのでは決してなく、私たちを栄光の場に立たせるために召し出して下さいました。

私たちが信仰を生きる中で、難しさを感じたり、苦しみを覚えたりするのは、神様が私たちに良いものを下さる力が無いから辛かったり、神様の手が短いから苦しかったりするわけではなく、神が約束して下さっている栄光の場へと導き、進み行く過程です。

これが、今この第一テサロニケ 5 章の御言葉が、私たちに言わんとしていることなんだと思います。

出エジプトをしたイスラエルの民たちのことを例に挙げますと、もう少し分かりやすいかもしれません。

エジプトの王ファラオに 10 のわざわいを下し、完全に降参させ、主なる神様はイスラエルの民たちを、400 年にも及ぶ奴隷生活から救い出して下さいました。

ところが、最初にその行く道を何が遮ったのでしょうか？

海です。

行く道を遮る目の前に広がる広大な海と、後ろから迫りくる追手のエジプト軍。

でも、ここでも主が、強い風で海水を押し戻し、海を乾いた地面とされながら、右も左も水が壁のように立っているところを、イスラエルの民たちは渡って行き、助かりました。

すると今度は、飲み食いの問題が生じます。

200 万人以上の人々が飲んで食べるだけの食糧がないのです。

辛い苦しい奴隷の身分であったことをすっかり忘れてしまったかのように、「肉がない」、「パンがない」と不平不満をもって騒ぎ立てました。

そこで神様は、今度は、普通ではあり得ないような方法、岩を割って水を出し、天からマナという不思議な美味しい蜜の味のする薄焼きパンのようなものを毎日降らせて下さりながら、彼らを養って下さいました。

自分たちの力ではなく、神のみがお出来になるという方法をもって、彼らを養って下さいました。

そうして、乳と蜜の流れる約束の地カナンの地へと導き上げるために、彼らを荒野の中を進ませます。

ところが今度は、約束の地カナンを目の前にして、その地に入ることを拒絶します。

「あんな所には行けない。あんな怖いところには行けない」と、神の約束の言葉を否定し始めました。

すると遂に、永遠の寛大さをお持ちの主なる神様が、「モーセとアロンとヨシュアとカレブ以外のすべてのイスラエルの民たちを滅ぼす」とおっしゃいました。

その時、即座にモーセが、主に申し上げます。

「主よ、他の人たちが見た時、『神という者が、エジプトの王ファラオの手から彼らを救い出したまでは良いけど、荒野ではあの大人数を食べさせるだけの力が無くて、ひもじい思いをさせながら死なせてしまった』と言わないでしょうか？ 主よ、あなたの栄光と、あなたの名においてそんなことがあっていいはずがありません」と、主に訴えました。

すると神は、即座に、彼らをお赦し下さいます。

これは、モーセが言葉巧みに神様を説得したということではなく、モーセの口を通して、主なる神様というお方がどんなお方なのか、怒るのに遅く、恵み豊かであり、咎と背きをお赦しになるお方で、どんなことがあってもご自分が為さるとお決めになったことは、必ずや為さるお方であるということを告げ知らせたということです。

むしろ、荒野という困難な場所をお用いになりながら、主の民を主の民らしく造り変えていき、結局、乳と蜜の流れる地へと導き上げるお方だということです。

それなのに、イスラエルの民たちは、この主なる神様の「到達する救い」を見据えることが出来ずに、「この何もない荒野で暮らすより、奴隷の身分ではあったあのエジプトの方がいい。存分に肉を食らい、パンを食べていた方がよっぽど良かった」と、到達すべき約束の地カナンを見ようとせず、見えていませんでした。

今ある患難、困難、苦難、苦悩が全てとなってしまう、「到達する救い」を忘れ、「到達する救い」に与るために相応しい身なりとなるための訓練なんだという父なる神の深いご計画と御旨を見限ってしまいました。

つまり、「救いのかぶとをかぶる、救いの望みというかぶとをかぶり続ける」ことをしなかったということです。

今ある荒野の道のりが、その後になされる美しいことを成すために必要な過程であることを知らなかった、知ろうとしなかったということです。

Part Three

第二コリント4章に行ってみましょう。

コリント人への手紙第二4：17－18（パウロ）

新約聖書の怖い点は、正にここにあるように思います。

旧約聖書の長い時間と労力をかけてなされたことを、このように、たった一言で表現してしまうところです。

どんな信仰者にも苦難があります。

この前の聖書箇所にはこのようにあります。

コリント人への手紙第二4：8－10a（パウロ）

主イエス様を信じる者は、いつも主イエスの死を身に帯びているために、四方八方から苦しめられ、途方に暮れ、迫害され、倒されますが、窮することはなく、行き詰まることもなく、見捨てられることもなく、滅びません。

「父、御子、聖霊の三位一体の神様へと向かっている栄光の道を、何ものをも妨害することは出来ない」ということです。

もちろん、しんどいのは事実です。

そして、しんどいとどんな考えを始めるかと言いますと、「もういいよ。もう十分だよ。もう止めた」と思ってしまう。

信仰を生きる中で一番怖い敵は、「この世を生きる間、キリストの聖徒として生きることをしばし保留したい」という思い、これが最も大きな信仰の戦いなんだと思います。

そして、このことこそが、戦場において頭を刺され、頭を撃たれたことと同じだと言うのです。

致命傷に成り兼ねません。

かぶとをかぶらずに頭をやられた時には、それが、命取りになります。

イエス・キリストを信じる聖徒が、信仰生活を営んで行く中で注意しなければならないこと、そこだけは傷つけられてはいけないところは、私たちが何に向かって、どこを見て、何のために今この道を進んでいるのかを逃してしまい、見限ってしまい、私たちが当然のように旺盛に営んで行くことの出来る信仰生活を空しくしてしまうことは、頭に剣を刺され、重体になって、意識不明の状態と同じだということです。

イエス様が福音書の中で、しきりにお語りになる言葉があります。

「耳のある者は聞きなさい。目のある者は見なさい」という言葉です。

つまり、人々に耳があっても神の声が聞こえず、目で見ても神が見えず、手で触れても神を感じずという状態だったということなのでしょう。

そして、私たち自身も、この試みにどれだけ多く遭ってきたか、遭っている

のかと、思われます。

「どこを目指して進み、導かれている道のりなのか」ということを聞かず、見ず、感じず、今この世で、ここを生きていくことばかりが問題に思えて仕方がない。

神を信じていない人の方がよっぽどいい生活をしているように見え、神を否定した世界観の中で成功している方がよっぽど大きな成功を手に行っているように見え、イエス・キリストよりも、はるかに金の方が輝いて見えてしまい、今、私の生き様の上に働いている救いに到達させるための神の御手が見えない、聞こえない、感じない。

または、「神はいない」と言い思う者を、聖書は「悪しき者」だということけれども、そういう人たちの方がよっぽど知的に見え、よっぽど理性的に思え、学さえあるように感じ、人々から賞賛まで受けながら喜ばれ、そんな彼らの道はいつも栄え、輝いて見えて仕方がない。

そんな霊的状态にある信仰者自身のことを、詩篇 73 篇ではこのように告白しています。

詩篇 73 : 21－22 (パワポ)

「罪から滲み出てくる苦みに満ち、目の前の苦しみがすべてであるかのように思えてしまい、神の御手を見出せない時の姿は、正に、聞こえない、見えない、感じない、愚かで考えもない獣のようだ」と、信仰者自らが告白します。

でも、ここで終わりません。

この詩篇 73 篇を歌った信仰者は、そんな中にあっても、「救いのかぶとをかぶり続けた」と告白します。

詩篇 73 : 23－28 (パワポ)

「聞こえない、見えない、感じない、愚かで無知な獣のような中にあってさえも、それでも私は絶えず、神よ、あなたとともにいました。あなたの救いの達成を見限ったこともなく、諦めたこともなく、辞めようと思ったこともなく、私の右の手をつかんで下さっているあなたの諭しを悟りたいと努め、後にある栄光を望みました。私の幸せは、何かをたくさん所有することでもなく、誰かに期待することでもなく、あなたのみそばにすることが、幸せです。あなたが私の財産そのものです」と、この詩篇 73 篇の歌い手は、救いのかぶとをかぶり続けました。

Conclusion

私たちは、救いのかぶとをかぶり続けなければなりません。

なぜなら、「到達する救い」があるからです。

使徒パウロ先生が、ピリピ書で、「恐れおののいて、自分の救いを達成するよう努めなさい」と仰っている通りにです。

今私たちは、確かに、陶器師であられる主なるイエス様の御手の中で、制作中の器です。

素晴らしい器に造り替えられることが決まっている制作中の器です。

だから、先週の崔先生のメッセージの中でも語られましたように、失望せずに、諦めずに、時が来て刈り取ることを期待しながら、肉ではなく、御霊に蒔き続けながら主にある善を行うのです。

最後に、ローマ書の御言葉を読んで終えたいと思います。

ローマ書 13 : 11 - 14 (パウロ)

この御言葉の内容が、私たちの救いのかぶとであることは間違いありません。
この救いのかぶとをかぶり続ける私たちでありたいと願います。
お祈りいたします。

祝祷：テサロニケ第一 5 : 8